

研究テーマ：学習者の言語習得のためのモチベーションを高めるための絶対評価
を用いた効果的指導法

所属 高知市立城東中学校

氏名 橋尾 環

RG JH3

1. 研究の背景

(1) 本校の特色

本校は3年前より英語・数学の授業において「少人数学級」のシステムを導入し、昨年から
は全学年・全クラスでこの方法を用いて授業実践を行っている。クラスの分け方は、2分割
方式（単純にクラスを2分割する方法）を取り入れている。この方式の利点として、「生徒一人
一人の学力を把握し、それに応じた個別指導のために多くの時間を設定できること」などが考
えられる。

(2) 課題

- ・生徒間の学力差が大きく、授業での到達目標設定を統一することが難しい。
- ・授業回数が週3時間になり、生徒1人1人の課題に応じた指導や4技能の力を測るための
評価活動が十分できていない。

2. リサーチ・クエスチョン

「学習者が事前に自分の到達目標となる評価規準、評価基準を認識した上で評価テストに向
けての学習を行い、評価テスト後においてもその結果が学習者に対して適切にフィード・
バックされることは、学習者の言語習得のためのモチベーションを高めるために効果的
である。」

3. 予備調査

(1) 授業観察の結果——「会話テスト」「音読テスト」

2つの実技テストを4つの観点から評価するテストをおこなった。リサーチ・クエスチ
ョンで提案した内容検証のために、今回のテストの評価規準、評価基準をあらかじめ生徒に
示しておいた。

＜授業の様子＞

ほとんどの生徒が練習段階から積極的にペアワークを行い、テストに向けての準備がよ
くできていた。特に「会話テスト」では、全体的にインタビューとしてのALTとうまく
コミュニケーションがとれていた。「音読テスト」では、発音・リズム・イントネーショ
ン（言語）の力がよく身についていることがわかった。

(2) 英語力を示すデータ

- ・CRT——特に「表現」「言語文化」の力において、全国レベルよりも下回る結果が強
く出た。

(3) アンケート「3年生英語学習に対する理解度を測るための意識調査」

「英語嫌い」を作り出す原因の多くは、2年生での学習によるつまづきにあることがわか
った。どんなに英語が苦手な生徒も、「英語がわかるようになりたい」という気持は他の
生徒と全く同じであることも結果として得られた。

(4) 生徒の自己評価——「会話テスト」「音読テスト」

【テスト前に評価の内容がわかっていた方がテスト結果は良くなると思うか？】

「会話テスト」——「はい」(44%)「いいえ」(16%)「わからない」(40%)

「音読テスト」——「はい」(63.8%)「いいえ」(8.2%)「わからない」(28%)

※ 以上の結果より、事前に生徒に評価の内容を示してあげることは、生徒が意欲的にテストに取り組むためのモチベーションを高める手助けになる。

(5) 文献研究

【テーマ】生徒の英語学習に対するモチベーションを高めるための学習活動と評価活動

① 自己目標の設定 ② 自己評価表 ③ アドバイス・カード ④ 目標達成カード

＜参考文献＞本多 敏幸 著 「到達目標に向けての指導と評価」(教育出版)

4 仮説の設定

(1) 仮説

英語学習の評価項目を、評価活動の前に生徒に提示したり、活動後にその結果を生徒や保護者にフィード・バックすることは生徒に自分の目標や課題を持たせることになり、生徒の学習意欲を高めるために効果がある。

5 計画の実践

「買い物の場面」での英語を使ってペアでオリジナルのシナリオを作成させ、店員と客のロールプレイで「スキット発表」を行わせる。

6 実践の結果

(1) スキット発表自己評価表(生徒用)

① 【活動に対する意欲・関心・態度】

ア とてもまじめに取り組めた 11/13 イ 暗記しようと努力した 10/13

(2) スキット発表評価表(教師用)

① 【活動に対する意欲・関心・態度】

ア 十分満足できる 「A」 13/13 イ ほぼ暗記できていた 「A」 11/13

② 【表現する力】

ア 声の大きさ 「A」 4/13 イ 発音の正確さ・明瞭さ 「A」 7/13

7 結果の検証

上記の「生徒の自己評価表」と「教師の評価表」の結果からも分かる通り、今回の活動に対する生徒の「意欲・関心・態度」はとても意欲的で、発表の内容にもその生徒の前向きな姿勢がよく表れていたと思う。感想の欄にも、この活動に対して否定的な生徒は一人もなく、むしろ全員の生徒がこの「スキット発表」を楽しんで参加することができたようである。

8 成果と今後の課題

この度、私のリサーチクエスションの妥当性を検証するために「会話テスト」「音読テスト」「スキット発表」を実施した。その結果、その妥当性を裏付けるようなデータを得ることができた。つまり、「**学習者が事前に自分の到達目標を認識していることは、学習者の言語習得のためのモチベーションを高めるために有効である**」ということである。

最後に、今回私ができなかったこと、そしてこれからは是非していかなければならないこと——それは、中学1年生からの積み重ね学習の中にこのような評価活動をどんどん取り入れていくことだと思う。つまり、中学3年生スタートでは限界があった自発的な創作活動を支える英語力を、中学1年生からしっかり身に付けさせなければならないということである。そして、生徒が自分の学習のゴールがしっかり認識できて、意欲的に学習に参加できるような環境づくり——それが私たちのこれからの課題だと思う。

